

令和四年一月六日(木)

新型コロナウイルス感染の再燃状況に鑑み、  
メール句会となった。

長尾 進一郎

池の面や葉々を閉ぢ込む初氷

山稜を超えし初日の出のビーム

何事も無かりし幸や雑煮椀

表裏機械任せの年賀状

初雪の躊躇ひながら落ちにけり

宮原 凧

冬ざれやこれで仕舞ふという賀状

小吉を大事に帰る初詣

雑煮椀注ぎし底より鶴翔べり

老若の歳寿ぎし花びら餅

山宿の墨の品書き冬紅葉

大津 そうかい

ポケットに去年の硬貨寒波来る

妻にそと明かすしくじり初笑ひ

山峡や平家の里へ初明り

大年や煌めく神戸初汽笛

寒月や人の背負へる運不運

斉藤 まさお

ほそぼそと暮す佳き日や初鴉

里山の白き兎のかくれんぼ

元旦やコロナまかせの年の計

冬ざれや花束枯るる事故の跡

降る雪や雪掻く人の黙黙と

高橋 由紀子

庭のみかんむけば種まで愛ほしき

ベランダの鉢整へて大晦日

ふるさとの鮭の粕煮や年越しぬ

菜箸をお初におろしおせち盛る

元旦や宴の後の皿の山

森田 元斐

新春の煌めき寿ぎ初しぼり

凧糸を握る幼子多摩河原

孫という宝と並び初詣

息潜め山の端を追ふ初日の出

来し方の悲喜を列ねて初詣

中村 晃也

亡き母の羽織を出して初詣

初風呂やお湯をまるめて嬰を抱く

初日の出ほのかに柚子の香る椀

巻き尺をシュルルと戻し年迎え

初日燦山の出湯の湯気白く

新田 ゆふき

山行きて霜ふむ靴や弾む音

初春や市バス連なる京大路

初雪や心清める貴船道

水占みずうらひに浮かぶ中吉初みくじ

初雪や欄干に積む思ひ川

志村 良知

初富士の山巒よぎる雲一片

初雪の舞ふや万物形失せ

初弾きや昭和演歌を所望され

初買ひのビールやミルクを付け足され

海に橋都会に白波初筑波

首藤 しずを

初場所や呼出しの声のどやかに

客送り正座崩せる冬座敷

雪国の冬の明るし声弾み

小寒や蛹見つけし妻の声

山鳩のほろろに初日昇りけり

安藤 晃二

疫躲すオンラインなる初句会

初富士の白きに惹かれ加速せり

山寺へ踏む吊り橋や冬ざるる

ミュンヘンの街の灯照らす霧氷かな

数の子の塩抜き難し厨かな

内藤 あした

さざ波のキラキラ光る初日の出

冬夕焼富士のお山のシルエット

年賀状繰れば姿の目に浮かび

ほんのりと甘き笑顔や屠蘇の味

木枯しや木立一本今日寂し

西川 知世

宿り木の毬を豊かに初御空

丹沢峰の頂き連ね大旦

裏山の朝を鳴きて初鴉

無濾過とふ盃重ね柳簪

曳かれゐて野を離れざる子ども風

以上

今回は令和四年二月三日(木)、

兼題は長尾進一郎さん出題の「梅」、席題は

西川知世さん出題の「節」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

梅はバラ科の植物。古代に中国から入り、万葉時代依頼、貴族の風雅の心を培い、現在に至るまで春の到来を愛でるにふさわしい花である。傍題には野梅(やばい) 臥竜梅(がりようばい) 青龍梅(せいりようばい) 残雪梅、残月梅、飛梅(と

びうめ) 鶯宿梅(おうしゅくばい) 盆梅、枝垂梅、

梅が香、白梅、老梅、梅林、梅園、梅の里、梅屋

敷、梅の宿、梅の主(あるじ) 梅見、寒梅、夜の

梅、闇の梅 とあり、いかに人々が梅を愛で詩心

を募らせたかがわかる。少し遅く咲く紅梅は別項

として挙げられ、未開紅、薄紅梅 が傍題に挙げ

られる。

名句は鬼貫、芭蕉の時代からたくさんあり、いかに自分の目線と言葉を研ぎ澄ますか、個性をだすが楽しみとなる。

梅が香にのつと日の出る山路かな

芭蕉

勇気こそ地の塩なれや梅真白

中村草田男

白梅にひと日南をあこがれぬ

石川啄木

梅も一枝死者の仰臥の正しさよ

石田波郷

活けし梅一枝強く壁に触る

山口誓子

厄介や紅梅の咲き満ちたるは

永田耕衣

紅梅に牛つながれて泪ぐむ

森 澄雄

紅梅や仰臥に果つる二十代

古賀まり子

白梅のあと紅梅の深空あり

飯田龍太

梅の夜の重みを外すネックレス

高津まり子

感染爆発紅梅噴き出すやうに咲く

夏井いつき

紅梅や影にも音のつきまとふ

藤田湘子